

“10万人の命を救え”キャンペーンからのビデオメッセージ

米国医療質改善研究所 (IHI) CEO

D. Berwick 博士



ドナルド・バーウィックです。私は医療質改善研究所 (IHI) のCEOを務めています。

IHIは世界の医療の質の向上を促す非営利組織です。また私はハーバード医学校で小児科学及び医療政策学の教授を務めています。ハーバード公衆衛生大学院の教授も兼務しています。

今回 医療安全全国共同行動キックオフ・フォーラムでごあいさつの機会をいただき、心から感謝申し上げます。私がとてもうれしく思うのはこの活動の目的に大いに賛同できるからです。皆さんの熱意で仲間が増えつつあるようですね。キャンペーンを運営する関係者の皆さんに対し、この場を借りて感謝と祝辞を申し

上げます。医療の質・安全学会理事長の高久史磨先生、日本病院団体協議会議長の山本修三先生、日本医師会会長の唐澤祥人先生、日本看護協会の久常節子会長、日本臨床工芸技士の川崎忠行会長にお礼を申し上げます。また本キャンペーンの私の同僚であり、古くからの友人である上原鳴夫先生にも感謝の言葉を申し上げます。

2004年にIHIは、安全な医療の技術や知識を広めようと考えました。全米を対象とした規模です。2004年の12月に米国初となる患者の安全のためのキャンペーンを展開しました。“10万人の命を救え”キャンペーンです。過去の経験を存分に生かし、具体的な6つの行動目標を全米に提案したのです。例えば、もしすべての病院がこのキャンペーンに真剣に取り組んだとしますと、防げるだろうと思われる死亡の数はおそらく18か月間で10万人にまで上るはずですが、そこで全国に呼びかけたのです。

“10万人の命を救え”作戦を始めてみると全米各地で大きな反響があり、大変驚きました。インターネットや電話を使い、資料も提供しました。そして目標の18か月後には3100余りの病院が参加していました。無償の活動にこれだけの数の病院が参加してくれたのです。病院での成果は上々でした。米国における死亡率は年々減少傾向にありますが、キャンペーン中はとくに低い数字になりました。これがキャンペーンの成果だと断言はできませんが、参加した人々の熱意はたいへんなものでした。また、たくさんの病院の協力が得られたのです。

この勢いをそのままに、2006年12月からは“500万人の命”作戦というキャンペーンを始めています。今回は患者さんの死亡だけではなく医療に伴う傷害を避けることも目的としました。2年間で500万人の患者さんを傷害から守ることが目標です。2年目に入っているこのキャンペーンでは新たに6つの行動目標を加えています。

米国でのキャンペーンを通して人々の情熱と知恵が医療分野に注がれています。患者さんやその家族からは数多くの感謝の声が届いています。驚いたことに米国の患者さんからはこの活動に対する懸念や怒りはありません。“患者は危険なのか?”という怒りの声ではなく、お礼の言葉が届いています。人々の努力によって米国の医療が新たなレベルに達しているのを感じています。医療安全全国共同行動が日本で行われることは非常に心強く喜ばしいことです。私たちへの大きな励ましとなるでしょう。皆さんの活動が成功することを見守っていますし、協力は惜しみません。改めてお祝いの言葉と感謝を申し上げ、今後リーダーシップを発揮されることを期待します。今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございます。

(http://kyodokodo.jp/080517forum_video.html 2008年5月17日)